
夢のように、おりてくるもの

磯崎愛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢のように、おりてくるもの

【Nコード】

N2896P

【作者名】

磯崎愛

【あらすじ】

「夢使い」の青年と大学生。ふたりはコンビニのバイト同士。仲はけっして悪くないけど、ちょっと微妙な距離……。

「夢使い」という職業のある、少し不思議な世界を舞台にしたおはなしです。

（全6話）

自サイト「唐草銀河」からの作者による転載です。

1話

わたしの一日は、夢秤の調整からはじまる。

夜のうちに降ってきた夢は、その香音の振れ具合で秤の傾きを変えてしまう。先週この安アパートに越してきた起業家のおかげで、わたしの仕事道具は悪夢のほうに傾きやすい。寝る前に悪戯をして少しばかり心棒をずらしておいたのに、滑稽なくらい斜になっている。

どうやら昨夜、隣の男にはよい夢が降りたようだ。アーモンドに似た甘い匂いが残響にうつすらと揺曳している。彼はいま、夢から醒めたに違いない。わたしは髪をふりはらい、その芳香を胸いっぱい吸いこんでベッドからおりた。

ふと、この傾斜具合を誰かに見てもらいたいと秤を直す手をとめてみたが、誰に見せるあてもない侘びしい独り暮らしだ。そしてまた、週に一度、依頼があればいいほどの「夢使い」稼業より、日々の真面目な勤労のほうが大事ではないかと、そんなふうにも考えた。田舎にいたころならば思いもなかったような発想だ。

よって、わたしは不精した。一日くらい怠惰をしても秤の調子が悪くなることはないと思いつけて、金と銀に輝く夢秤をそのままにして家を出た。

都会では、夢使いの居場所はたくさんある。たとえば、わたしのようにコンビニエンスストアのアルバイト店員などだ。

『どんな夢でもお望みどおり。あなたの願い、「夢」なら全部かないます!』

店長のすすめでカウンターの端に専用の依頼箱を用意したものの、わざわざ用意してくれたポップの「文句」にはとまどった。わたしの生まれた土地では、こんなあからさまなことをいうひとはいなかった。それはたいてい口伝の紹介で、わたしの師匠も一見のお客をとることは年に一度もなかったはずだ。店長は都会じゃこれが流行

りだと笑って取り合わず、箱はその場所に鎮座した。

それからふた月、ぽつぽつと依頼がくるようになった。店長はわたしの副業を面白がり出勤時と帰りに忘れずに中を確認するよう指示するが、同僚はこちらの横顔を見て面白くなさそうな顔をする。大学生と聞いているので、たぶん、わたしより幾つか年下なのだろう。テレビや雑誌から抜け出てきたように垢抜けて如才ない男の子がいるのだと感心した。

ところが、そんな彼の、女性のように整えられた眉が顰められるのは決まってわたしが依頼書を手にするときのことだった。それを見るたびに、自分が万引きでもしているような嫌な気持ちになった。むろんわたしは勤務時間にその箱を覗いてみたりすることはないし、仕事の妨げになるようなことは一切していないつもりだ。都会の人間には、この仕事がまじないじみた怪しい行いのように写るのかもしれない。そうは思ってみたが、わたしの気持ちは晴れなかった。

1話（後書き）

全6話です。

2話

こうして思い返してみると、彼は帰りがけや休憩のときに自分の得意料理から気に入った映画のはなしなどするくせに、夢使いの仕事に関しては一度も口にしなかった。店長をはじめ、たいていのひとびとが真っ先に興味や関心を示すその一点に触れようとしないのは、もしかすると夢使いを軽蔑しているのかもしれない。同じ年頃の気安さがある一方、ひんやりと滑らかな絹の手触りに似て、奇妙に隔てられているようにも感じていた。それが都会のひとらしさかと思っていたが、真実は、わたしの稼業へのわだかまりのせいではなからうか。そんなふうに独り勝手に被害者意識をもって考えることもある。

こんなことを思い悩むのは、今日の昼日中の事件に原因がある。制服をきた女子高生たちが「どんな夢でもって、すげくない？」とわたしの顔をちらちらと見ながら、頬を赤らめるほどの願望を甲高い声で騒ぎ立てた。

たしかに夢をみるのは自由だ。それなのに、夢使いのわたしを前にして、頭がおかしいと思われたいだろうかと不安な表情で言葉をとめるひとびとをわたしはよく識っている。誰にも迷惑をかけない夢の中でさえ、欲望があらわになることを恐れ、分不相応な想いを恥じるひとびともまた多数いるのだ。いくらわたしがその夢を覚えていられないのだと説明しても、話すことをやめてしまうひとが。

だから、彼女たちが「どんな夢でも」というところに反応するのはある意味とてもまっとうな神経だと思う。しかしながら、今日のわたしはいささか虫の居所が悪かったのだろう。いや、この副業がよく思われていないという負い目が、声をあげさせた原因かもしれない。

わたしはカウンターの外に出て彼女たちの前に立ち、他のお客様の迷惑になると伝えた。感情的にならないよう気をつけたつもりだ

ったが、彼女たちは夢使いに対する侮蔑の言葉を投げつけて、もうこんな店なんて来ないと叫び、走り去っていった。

正直、店に来ないと言われたのには少なからず慌てたが、奥にいた店長からも咎めだてはされなかった。店長はわたしの謝罪にかかる肩をすくめ無精髭にとりかこまれた唇を歪めて、ま、それは織り込み済みだし色んな人がいるからね、と笑っただけだった。

それなのに、ロッカールームで独りになると肩が落ちた。あのときは同僚の様子をうかがう余裕はなかったが、なにも言ってこなかったことを考えればいい感情はもっていないだろう。ひとつに縛っていた髪をほどき、洒落たところもなく流行らない長髪でトラブルの種をかかえこむわたしを彼がどう思っているか想像するとうんざりした。

わたしが髪を伸ばすのは香音を拾いやすくするためで、本当は爪も長めのほうが都合いい。ここでは不潔にみえるのでそれはしないが、わたしのいた土地では夢使いはみなそうしていた。切りそろえられた爪先を見てもれた吐息は熱く、あときは冷静でいたつもりが、今になって、彼女たちの言葉にひどく傷ついているとわかった。

3話

ひさしぶりに、「物乞い」という言葉をきいた。夢使いに対する、一般的な罵倒だ。その昔、夢使いの多くが放浪し、一宿一飯の礼に香音を鳴らした。だんだんに定住するものが増えた今、わたしのように副業とするほうが多いだろう。今ではちゃんと組合さえあるというのに、物珍しさと異なる能力への反撥ゆえか、差別は色濃くあるようだ。

それでも、数十年前までは、夢使いはもっと生きやすかったそう。力のある夢使いは尊崇をあつめ、御殿のような家に住むものもあつたと聞く。もちろん、夢使いは公職につくことはできないし、当時から差別するひともいた。けれど、道化のように思われてはいなかったはずだ。

田舎よりこの街の相場はずっと高いが、要領の悪いわたしはただ働きのことも多い。実をいえば、わたしに話すことをやめてしまったひとたち。おのれの夢を他者に明かすことを恥じ、恐れ、忌避しようとしたひとたちに、彼らの「夢」を届けていた。それはささやかな一夜の慰め、泡のように儚い幸福ではあるけれど、望むことそれ自体は悪ではない。わたしはそう、思っている。

じっさい、無料奉仕をしたとて規則違反となるほどのことではない。それと同時に、そうしたからといって彼らに感謝されるわけでもなく顧客がふえるわけでもない。わたしの自己満足とこの能力を錆びつかせないために練習台になってもらったささやかな御礼だといえ、不遜だろうか。

ほんとうのところ、相手の話を聞かなくとも、夢使いには「夢」の香音が聞こえる。もつといえ、わたしには、その「夢」の内容は見えない。つまり、依頼人は「夢使い」に見たい夢の中身を話す必要はないのだが、それは何があるかと隠しておかなければならない秘密だった。

かつてわたしはその謎を師に尋ねたことがある。師は、わたしの両目の真ん中あたりをじっと見据えるようにしてしわがれ声でこたえた。

それは、依頼人に内省を促すためでも欲望の熱を冷ますためでもなく、ただ、われら夢使いの与り知らぬ言霊を呼び寄せるためのこと

と
はるか昔、この視界の王たる夢秤王は、香音を聞き分けられるひとびとに視界樹から作られた夢秤を授けることを約束した。爾来、夢使いはひとびとのあがないによって、視界樹の幹からおりる夢を聞き、そのひとの望む「夢」へと違えつづけている。

たまに、わたし自身、これが割に合わない仕事だと思うこともある。ちかごろでは夢自体みることを忘れているひとも多く、廃業する夢使いも多いときく。それでも夢秤を遊ばせておくことはできないし、香音を鳴らし続けねば東から夜が明けることはない。

都会ではそんなことさえ忘れられているように思えたが、それだとして、わざわざ口にする必要もない。畢竟、わたしの不満は誰かに自分を理解してもらいたいという、ただそれだけのことなのだ。

4 話

「さっきは災難でしたね」

ロッカールームを出たところで同僚に声をかけられて目をしばたくと、彼はすこし困ったような顔でつづけた。

「おれが出てくるとよい厄介なことになったと思うんで」

「わたしの仕事の件ですから」

撥ねつけるような言い方をしたわたしにも、彼は表情をかえずにつづけた。

「それはそうなんですが。おれのいたところじゃ、夢使いのひとにあんな言い方するなんて有り得ないんですよ。その……」

あんなふうに扱われる存在ではないと、そう言ってくれているのだと察した。彼の故郷では、闇を抜くものとして夢使いが未だに尊敬されているのだらう。その一言にささくれた気分は払拭され、自分が独り勝手に被害者意識に押し潰されていたと察したが、そのことには触れず、わたしは気になったことだけ聞き返した。

「どちらにお住まいでしたか？」

「ずっと北の外れの小さな町です」

「北の夢使いは優秀な方が多いと聞いています」

「あなたは？」

自分が優秀かどうかは正直よくわからない。

「試してみますか？」

彼の切れ長の瞳が大きくなって、わたしは慌てた。その驚きによって、今の質問は出身地を尋ねられたのだと察したが、もう遅かった。自意識過剰だと思われるに違いない。じっさいその通りなのだろうが、今まで自分から「営業」したことがないというのにこれはどうしたことだろう。押し付けがましい奴だと思われるのは避けたいものだ。どうにかして今の言葉を撤回できないかと考えたとき、彼のことが耳をうった。

「おれの家、来ますか？」

昔ながらの慣習によれば、それが正しい方法だ。けれど。

「すみませんが、今日は無理です」

夢秤の調整を怠ったまま、家を出てしまった。無理をすればできなくはないが、そんなことはしたくない。わたしがさらに説明をしようと言を聞くと、彼が形のいい頭をふってこたえた。

「その、謝るようなことじゃなくて、いきなり誘ってこっちこそすみません。おれのほうは、いつでもいいんです。あ、お互い夜のシフトんときは駄目でしょうけど。まあ、その、ええと、おれはあなたのことが気になるってことで」

いつも冷静な彼らしくないしどろの言葉に首をかしげると、彼がため息をついてから顔をあげた。

「すみません。はつきり言わないと、あなたみたいなひとには通じないですね。たぶんあなたはおれが『夢使い』を嫌ってると思ってたでしょうけど、そうじゃなくて、おれはあなたが好きだから、たとえ何もなくても、あなたが依頼人と一夜をすごすのがつらいんですよ。そんなのおかしいってわかってるんですが、でも、ダメなんです。それでわかったんですが、おれはあなたが好きなんだなあって」

5話

「待ってください。わたしは依頼人の家に必ず泊まるわけではありませんし、それより何よりご承知でしょうけれど、わたしは女性ではありませんよ?」

いまの言葉から察するに、彼はきっと、わたしが依頼を受けるたびに依頼人と一晩過ごすのだと思っていたのだろう。それは完璧な誤解だし、とりようによつては古からつづく典型的な「夢使い」への偏見と侮辱にも成り得る。

それについてどう話したらいいか考えようとして、彼の眉が真ん中に寄せられていることに気がついた。それは、不快なものを見せられた表明だと思っていたが、先ほどの彼の言葉から類推すれば、それは純粹に苦痛と悲哀の表現だった。

彼が、こちらの視線をよけるように項垂れたのを目にして、愕然とした。わたしもまた、男性が好きになるのは女性だという、偏見をもっていたということに。

夢使いでないひとが香音を聞き分けることができないように、わたしが知らなかっただけで、見えていなかっただけで、それは今、ここにある。

彼が下を向いていたのは、ほんの十数秒のことだったのかもしれない。けれどわたしは立ち尽くし、ただじっと、息を詰めて彼を見守っているだけだった。

「すみません……今の、聞かなかったことにしてください。いちおう秘密っていうか、あなたが興味本位で誰かに話すとかは思っていないですけど……その、帰りがけに変なことと呼び止めてすみませんでした。ほんとはここまで話すつもりじゃなくて、さっき嫌な思いしたんだろうなって、とにかくそれを言いたかっただけで、すみませんでした」

わたしにも、彼がただこちらの気持ち思いやって、わざわざ口

ツカールームまで出向いてきたのだと理解できた。それに、なんどもスミマセンとくりかえす彼の心中を思うと、いてもたってもいられなくなった。

「あのっ」

すらりとした背中に、わたしは精一杯の声をあげた。彼はゆつくりと振り返り、緊張した頬のままわたしを見た。

「こんど、よろしければ、あなたの知っている『夢使い』の話を聞かせてください」

「え？」

「たぶん、あなたはわたしの仕事をよくわかっていないように思います。それはわたしがお話しなかったせいでもありますし、夢使い全体やこの視界すべての問題でもあるかもしれません。それからもう一点、わたしは修行で手一杯で、恋愛というエネルギーを使いそうなことをしたことがあります。だからあなたの話しに吃驚してしまっ……」

わたしは嘘をついた。恋愛をしたことがないのは本当だが、驚いた理由はそうではない。しかし、それを口に出すことはできなかった。正直に打ち明けて謝罪する方法を選ぶには、わたしはすでに許しを乞うことも許されぬほど彼を傷つけてしまったと感じていた。それとも、こうした考えも驕り昂ぶりであろうか。とはいえ、このまま黙っていては彼も困るだろう。なにか言わなければと考えを巡らしていると、彼がおもむろに吹き出した。

6話

「やっぱ、あなた、面白い」

「おもしろい？」

「ええ」

ひとと違う職業だから興味を持たれたのだろうかと考えて、彼がさきほど「興味本位」という言葉をつかったことを思い出して床をみる。神経過敏になりすぎているのはきつと、わたしのほうだろう。彼はわたしが頭をあげるのを待ってから口をひらいた。

「気を悪くされたなら、すみません。その、ありがとうございます。おれのほうも焦ってあなたを驚かせたみたいだし、この話はまた今度ってことでいいですね？」

そういった顔には、さきほどのようにうちひしがれた様子は微塵もない。彼はわたしが勢いに押されてうなずくのを確認し、ことばを重ねた。

「ひとつ、いいですか？ たしかに恋愛はスルものでしょうけど、

恋は向こうからやってくるから防ぎようがないんですよ」

「夢のように？」

「そう。夢のように、おりてくるんです」

彼はしかと頷いてのち、あ、夢達えみたいなのはナイですよ、と慌て顔で言い添えた。わたしたちは顔を見合わせ、お互いに笑いあった。

彼はそれから、さすがに戻らないとまずいと時計をみて、じゃあ気をつけてと言い残して店のほうへと消えた。

扉がしめる音を聞き終えたと同時に吐息がもれた。しかしそれは、先ほどロッカールームでついたものとは明らかに違う。東の空を眺めて響しい香音の降りるのを待つ、なにかを期待する予感に似ているものだった。

ずっと、恋とは落ちるものだと思っていた。自身の不注意で陥穽

にはまる危険な行為だと感じ、なるべく近寄らないで避けてきた。夢秤を平衡に保つよう、わたしのこころをまつすぐに、または平らかにしておきたいと望んでいた。しかしながら、彼のいうとおり、向こうからやってくるのだとしたら、たしかにそれは避けようがない。わたしは幸運にして（それとも不幸にして？）、今まで恋に急襲されたことがなかったのだろう。

それに、左右どちらにも振れない夢秤は悲しいものだ。それは、誰もが夢をみない、この視界に香音のならない証だ。そんなさびしい処にはいたくない。また、馨しく気高い香音だけを聞くほうがいいとも思わない。たとえそれが悪しき夢の放つ腐臭と耳を聳す爆音であろうとも、わたしはそれを聞くことを厭わない。

わたしはきつと、何よりも夢が好きなのだ。わたしが恋をしているとすれば、それは「夢」そのものだ。

足を踏み出してまず思い浮かべたのは、傾いだまになった金銀の夢秤のことだ。家に帰ってすぐに、あれを調整しないとならない。いつか、誰かにあの傾いだ夢秤を見せて笑う日が来るのかもしれない。その相手が彼であるという確信もなく、また実のところそうした願望も特にはないようだけれど、そんなことを想像する日がこようとは思いもしなかった。

もしも。

もしも恋が、夢のように降りてくるのであれば、わたしはその香音を全身で聞くことだろう。

わたしは「夢使い」。

夢のように降りてくるものを拒めるはずがない。

（終わり）

6話（後書き）

最後までお付き合いくださいましてどうもありがとうございます。
いつか、機会があれば「店長」のおはなしが書きたいな、と。
（このふたりのらぶらぶじゃないところがミソw）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2896p/>

夢のように、おりてくるもの

2011年4月27日20時55分発行